

兵庫県伊丹市大字 西野の小字地名

江戸時代の寛永 7 年(1630)昆陽村北方の芝野に新田中野村が開発された。やや遅れて正保 2 年(1645)までに東西に開発されたのが、東野村と西野村の 2 つの枝郷である。もっとも、はじめは単に「小屋新田」と記され、「西野」の初見は宝暦 6(1756)だった。

領主は貞享 3 年(1686)から文政 6 年(1823)までは武蔵国忍藩(埼玉県)の阿部氏で、新田中野村に陣屋があった。それ以外の時期は幕府領で明治 3 年に兵庫県に編入された。

新田中野村では綿作が盛んだった。また、西野地先で武庫川から取水する昆陽井は市域の南部を潤す重要な用水路だった。しかし、慶応 2 年(1866)には洪水で大被害を受け、年貢減免や貸付を嘆願、また 3 ケ年の僕約を申し合せている。

明治 22 年稻野村に属し、昭和 15 年には独立の大字になり、同年伊丹町と稻野村の合併により、伊丹市域に入った。この間堤防 200 間が切れたのを始め、武庫川と玉田川の出水にはたびたび悩まされた。

昭和 7 年尼宝バスが現在の地方道尼崎・宝塚線で営業を始めてから宅地開発が進むようになり、最近は高層住宅も増えて昔の面影は失われつつある。(西野地区地名表示板より)

新田中野村と屋敷地名

新田中野村を構成している東野、中野および当村の 3 村の集落の中心部には、このような「屋敷」地名があり、それらすべてに方角あるいは位置が示されており、(伊丹市域においては、他に屋敷地名は西桑津と山田にあり、前者のものは「屋敷」のみで後者は「東屋敷」「西屋敷」の二つがある。)

いずれも、集落の中心部分にあり「権力者の屋敷があったところ」と考えられる。当地区の場合も同様に集落の中心部分にあるが、前述のように集落の形成が江戸時代であり、すでに昆陽に権力者も存在しているので、この地区の場合は新田開発した人々の屋敷であろうと思われる。(従って、これを追跡すれば開発者の当時の屋敷が分かるのではないか)

また、次に記載するが、三村それぞれに微妙な表現の違いがある。例えば、東野地区では 7 つの屋敷地名があり、そのうちには端的に「東野屋敷~」というものや「上屋敷」「下屋敷」そして、「東上」「東下」「~屋敷前」というところがある。中野地区では 8 つあり「~屋敷裏(浦)」があり「中野屋敷~」というところは無い。西野には 2 つがあり、「東北」という東西南北という単一ではない地名がみられる。

また、この西野及び中野は街道の両脇にあるが、東野では「上屋敷」が中心になっている。
(中野地区)

北屋敷・西屋敷・中屋敷・屋敷西・東屋敷裏・西屋敷西・南屋敷東・西屋敷南
(東野地区)

東野屋敷東上・東野屋敷東・東野屋敷西・西屋敷前・上屋敷前・東野屋敷東下・下屋敷前
(西野地区)

「西野?」屋敷東北・西野屋敷西・「西野屋敷?」東南」

西野の小字

1. 高ノ(高野) (たかの)

西野の集落部分を除いて、一番高い畠地で、山野であった。「まんじゅう山」という高地があった。

2. 大谷 (おおだに)

前述の「字 高ノ」(東の台地)と集落(西の台地—西野東南)の間は低く、谷間のようになっている。なおこの「字 大谷」の東側に「字 高ノ」から小高い丘が続いており「馬街道(うまかいどう)」と呼ばれ、鴻池・荒牧を経て中山観音へ向かう街道があった。そして、その名のとおり、ごく最近まで馬車が通っていた。(中野字東馬街道・西馬街道)中野地先ではあるが、西野地区の人々にとって忘れられない地名である。

3. 屋敷東北 (やしきとうほく)

集落の北に位置している。「東北」というのはどこから見たところであろうか。位置からでは「字 西野屋敷西」の東北にある。「西野屋敷東北」ではないだろうか。また、この地の北に地蔵堂がある。行者講の人(瀧内やいち・瀧内ていじさん)が昭和 10 年ぐらいに造ったものである。

4. 西野東南にしのどうなん

集落の中心部である。位置から考えると「西野屋敷東南」の意味ではないだろうか。

5. 二ツ塚 (ふたつづか)

昔は 2 つの尊長塚(そんじょうづか)という名の塚があり、「家」「苗字」等により、お盆・祭り等の先祖迎えの場所が違っている。今は 1ヶ所だけが残っている。

【尊長参り】

「他人のたてた線香をとって、自分のものをたてる。」という参り方。また、この地に庚申堂があった。この「庚申」さんは大変子供好きで、「21 回線香を焚き、お参りすれば必ず良くなる。」といわれている。特に「いぼ」には効き目があった。

6. 塚穴 (つかあな)

「字 二ツ塚」の西にあり、一段と下がった地になっていた。昔より「馬廻し」「牛廻し」といって家畜の品評会のようなことが行われ、後は馬の蹄打ち・牛の爪切り等を春の忙しくならない前に行つた場所であった。ただし、塚があったかどうかは分からぬ。

7. 西野屋敷西 (にしのやしきにし)

集落の中心地であり、大地になっている。二毛作ができ冬に麦がよくできた。この地には「大師堂」がある。この「お大師さま」も病気などにおいては、なんでも効き目がある。前述の「庚申」さんと併せて、西野地区では大変大事なものであった。なぜなら、この周辺には医者(内科)は無く、小浜(宝塚)か、野間まで行かなければなかった。

8. 笹原 (ささはら)

西野集落の北にあり、その名のとおり笹原や草地が多くあった。百人一首にある「有馬山 猪名野 笹原風吹けば いでそよ人を 忘れやわする」と記されているように、一面の笹原であったものを、中野より分村した頃より開墾してきたものといわれている。

9. 西野北 (にしのきた)

これも名のとおり、西野集落の北方にあり、松の雑木林であった。

10. 西野西 (にしのにし)

前記の「字 西野北」の西にある。松の雑木林であった。今はほとんどが住宅地である。ただ、この地区の「西」は何からのものなのか?位置から考えると理解できない。

11. 南笠原 (みなみささら)

北にある「字 西野西」から引き続き台地になっており、このあたりも松の雑木林であった。(従つて、旧堤防ではなかろうか)「右 中山道」の道標があった。(昆陽井境目石?)

※この地のあたりに「行基の腰掛石」が埋まっている。僧行基がこのあたりの開墾を指図しており、水路等を造った。その昼食時に腰を掛けた石といわれているものである。

※「行基石」行基が弁当の中にあって石を箸で放ったという石で、箸でつまんだ形が残っている。
(1984年4月行基さんまつりプログラムより)

※昆陽池の土が甲山になったという話もある。

12. 上川原 (かみがわら・かみかわら)

後述3地区は武庫川の氾濫により畠に水田が河原(砂河原)になったので、区画をはっきりさせるため、これを大別して3つに分けたのでその名が残っており最も上(北)の地区。

13. 西河原 (にしがわら・にしかわら)

同上の西の地区

14. 東川原 (ひがしがわら・ひがしかわら)

同上の東の地区

15. 小割 (こわり)

武庫川の氾濫によって堤防が決壊し、一面の水田が河原となった。これを連日礫除けし、形の変わった地を「小割」し、分配したという。この地区は前記3地区の下(南)にある。

16. 外川原 (そとがわら・そとかわら)

「字 小割」の西に位置し、(そのうちの西半分は「字 武庫川」を地番設定したもの)さらに、武庫川の近くに位置し、まさに村から見ての「外の川原」である。また、前4地区と同じく、一面の砂原となったが(外川原は別名であったが)川原以外の川原ということで、外河原となったともいえる。

17. 坂ノ下 (さかのした)

西野集落の南端にあり、すでに述べているように集落部分は全体に高く、周囲は低い。そのため、東・西・南がそれぞれ坂になっており、現在もそのとおり、南の端が「坂の下」になっている。

18. 橋尻 (ひじり・ひのしり)

武庫川より「字 上川原」で取水した昆陽井の西野地区の最後の大きな「かけ橋」があった。(現在「大橋橋」がその名の名残)その下にある地区。この昆陽井はふだん水位は低く、水位があがればこの橋を通って水が下流に流れるようになっており、従つてこの低い所に水は常にあったので、夏は子供たちの遊び場であった。また、勘治橋・勘進橋という石橋(2枚の石の石橋)がかけられていた。

19. 十六名 (じゅうろくな)

十六区画(筆)にわけられ、そのうち上田・下田に分けられ、同じ面積でもそれぞれ米の取れ高は違っていたが、一面の湿地で、石高はよかつた。

20. 水出シ (みずだし)

西野の地先での水田耕作地であり、良い田が多い所であった。(昔は二十一名といわれ 21 名で耕作していた)昆陽下池の水を本流へ流す場所で、上から流れてきた水を逆流させ天王寺川へ、大雨や洪水の時は、余分な排水をした。

21. カマ池 (がまいけ)

その名のとおり、南に高い堤(横手堤)があつて常に水があった。大雨の時には川の水も入り込んでいた。蒲が池の周囲に密生していた。水田の用水や灌漑用に使われた。池で直径 100m 位のやや楕円形の池であった。

22. 下ノ池入江 (しものいけいりえ)

昆陽池の下にできた池で、昆陽池の分水をするための貯水池であったと伝えられている。この池の分水田の地名である。現に昆陽池の水が溢れて第二の池のようになり、そのため水田が 3 カ年に一度くらい収穫できなかつたのである。

23. 芝ノ小松原 (しばのこまつばら)

地力なく、ヤセ地の自然発生の松原で、そのため背も低く、小松林であった。現在ある県住小松原団地やチボリ桜台ハイツのある地区は「字 武庫川」が造成され、「字 芝ノ小松原」として地番設定されたもので、もともとの「字 芝ノ小松原」は「字 上川原」の北東に細長く隣接している地区である。

24. 武庫川 (むこがわ)

(河川敷、芝ノ小松原として変更)

昔は小浜(宝塚)まで入海があり、鰯が獲れたと聞く。六甲水系の美水で、大量の鮎が獲れ、網とバケツを持って取りに行つたことを思い出す。反面、山から多く砂が流れてきて、砂の中を水が流れ、砂の中に足が深く入り、抜けなくなつて困ったところから、一名「人取川ひととりがわ」と名付け、怖れられていた。

【こつ塚】

池尻から中野にかけて、「織田信長焼き打ちの場」の死体あと、といわれている。

(聞き取り)

昭和 61 年度農会長 瀧内幹雄氏
西野地区古老 宮崎修治氏

(文責:足立 繁)